エッセイ

古歌を訪ねて～その十「君が代」

丹下　重明

わが君は
　千代に八千代に細（さざ）れ石の
いはほとなりて苔のむすまで
　　詠み人知らず

古今和歌集・賀歌（がのうた）（343）

残念ながら延期となった東京オリンピック、とは言えご当地開催とあれば、メダルへの期待も大きく、それも金メダルとなればなおのことです。金メダルとなれば「日の丸掲揚」とともに「君が代演奏」があります。国歌「君が代」を歌い、演奏を聞く機会も多くなりそうです。

「君が代」の歌詞のもととなったのは、冒頭の古今和歌集（九〇五年撰進・以下古今集）の歌といわれています。筆者は、以前古今集の頁を繰っていて、たまたまこの一首に出合い、そのことを始めて知りました。

（本稿の冒頭歌の表記は、小学館発行の「古今和歌集」に拠った）。

「巻七・賀歌」には二十二首があり、この歌は巻頭におかれています。「題知らず」「詠み人知らず」とあります。内容は、人の長寿を祝い、祈る気持ちを詠んだものですが、この歌が、誰から誰に贈られたものかは分かっていません。

「千代に八千代に」は長い年月の意で、「代」とは、ここでは寿命や年齢のことです。

「あなた様には、千年も万年も長生きしてください、長い年月をかけて小石が集まって大きな岩となり、やがてそこに苔が生えるように」といっています。

「さざれ石のいわおとなりて」とは、一説には、中国の説話にある、水中から拾ってきた小石を、永い間仏殿に飾って置いたらいつのまにか、大きな岩になっていたという奇怪な話がもとになっているとのことです。

今日では、これは単なる想像や例え話ではなく、学術的には「石灰質角礫岩」とよばれる岩石があり、小石の集まりに、石灰岩の溶けだした白濁液が流れ込んで、永い年月をかけて大きな岩となるのだそうです。

現在では、「さざれ石のいわお」は日本の各地に散在していて、それぞれが「君が代」の歌とのいわく因縁を語っているようです。

先年、横浜歴研の旅行で出雲大社を訪れた折り、大社の入り口にもこのさざれ石が展示されていたのを拝見したことがありました。

ところで現在の「君が代」と違って、古今集歌の出だしは「わが君」となっています。「わが君」が「君が代」に変わったのは、平安末期か鎌倉初期といわれていますが、今日でも明確ではありません。ただ、「君が代」という表現は、古く万葉時代からあったものです。

また「君」とは、天皇とはかぎらず、広くさまざまな人を指していると考えられます。例えば、一族、一家の長老や、主君、上司などなどです。

現代でもその風習は残っていますが、古今集が編纂された時代は、朝廷や貴族の間では、長寿を祝うしきたりが盛んでした。四十の賀、五十の賀、六十の賀などなど。

当時屏風歌というのがはやっていて、その中心にあったのが賀にちなんだ屏風絵でした。その屏風絵に添えて詠まれた和歌が屏風歌です。古今集の撰者の一人だった紀貫之や、当時の女流歌人の第一人者だった伊勢なども、この屏風歌の名手といわれています。

冒頭の歌もそうした詠歌の一つではないかと考えられます。巻七・賀歌には、この一首を筆頭に以下三首の「詠み人知らず」の歌が続き、いずれの歌にも「君」の一字が詠み込まれ、その長寿を祈るものとなっています。

その後和歌の世界では、冒頭の「君が代」を本歌とする歌がいくつも見られます。

例えば、平安中期の勅撰集・拾遺集にある清原元輔の一首

茎を折って引っ張ると細微な管のようなところからクモの糸のように細い繊維が現れる。それは我々が良く経験するレンコンを折って引っ張ると糸を引くそれと同じものだ。この細い糸を撚って絲とするのである6)。しかし、動画を見ていて、撚る前の細さと、切れやすさ、繊維の短さが気になっていたので、少しばかりの本数の撚りでは機にかけるのが難しいだろうと思っていた。以前のことだが、町田市にある大賀藕絲館7)を訪れ、職員の方の好意で、実際に綛(かせ)になった蓮の糸と藕絲の織布に触らせていただいたことがあった。数十年前の綛や織布の作品だそうだ。それはかなり多くの糸で撚りをかけており、糸は太かったが、思ったよりも腰が弱く、なぜか頼りなげな柔らかさであった。やはり機にかけるのは難しいそうだ。糸は絹のような輝きも艶もなかった。染色も難しいというが、紅花で染めたという色はすっかり退色している。それでも、くすんだ生成りのようになった糸とざっくりと織られた裂は、落ち着きと素朴な佇まいを醸し出して、手に取ると柔らかさも温もりも感じさせてくれたのであった注3)。やはり、その糸は「何か」との繋がりを想像させるような糸なのである。

ひとつひとつの分子が目に見えなくても繋がっている。やがてそれは組織化して集合した時、目に見える糸に変わる。蚕の繭から採れる細い絹糸も、一本ではなく数本が混ざったものだ。それはさらに撚糸して強い絹糸になる。蓮の切り口から出てくる無数の弱い糸は、綿や麻と同じセルロースで出来ていて絹やクモの糸とは根本的に異なる素材である。調べてみると蓮の糸で織った仏画が存在した。北九州市にある広寿山福聚寺所蔵の藕糸織(ぐうしおり)仏画である8)。「藕糸織弥陀三尊来迎図」、「藕糸織聖衆来迎図」の3幅で、ともに江戸時代に織られたという。これらは福聚寺にある放生池の蓮をとって、糸を紡ぎ仏画を制作したとされる。「白色無地の藕糸をもって紺地の絹布の上に織りだされており、我が国の藕糸織仏画の中で最古に属し、優秀な作であるといわれる」と解説がある9a)。紺に染めた平織の絹布に、藕絲を緯糸にして綴織りとしているようだが写真ではよくわからない。これら3幅とも小笠原忠真9b)の夫人永貞院(本名:那須藤)が、忠真の供養のため制作したものであるとされている。

当麻寺では、平成12年に発掘調査が行われており、基壇周辺から当麻寺創建時の複弁蓮華文軒丸瓦が発掘されている10)。

欠けている丸瓦から見える蓮の花模様は、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』注4)を裏付ける百済渡来の瓦博士が指導した日本最初の瓦と同じように、何枚かの花弁を持ち花の中央には花托(かたく)があるようにみえる。エジプトでは、ロータス(スイレンの一種)は夕に花を閉じ、朝日とともに開花するところから、再生、永遠の生命の象徴とされ、太陽神と結び付き神聖視されている。また、遥かペルシャ文物の出発地方であるペルセポリスのアバダーナ宮殿跡の基壇壁面には12弁の蓮花文が配列されており、巨大な柱頭には太陽の化身のようにやはり12弁のロータス花弁が刻まれている11)。これらは、ロータス模様そのものが太陽としての象徴的な意味を持っていることの証だろう。蓮花の持つ意味やその模様は、遠くエジプト、西アジアからシルクロードを経て、また、蓮の花を象徴とする仏教と融合した。そして、太陽を司る毘盧舎那如来は、大日如来となり、蓮台に座され曼荼羅の中央で瞑想しておられる。古代から地域は変わっても蓮の花が持つ美しさは、如何に象徴的に用いられてきたか、当麻曼荼羅もまた蓮の糸と信じ、祈り、そしてその功徳を信じた人々に仏の本質を導いてきたのだ。

蜘蛛の糸とナイロン

「1938年10月27日、アメリカのデュポン社は世界ではじめて人造繊維の工業化に成功した」と発表した。ウォーレス・カロザースによって発明されたその名を「ナイロン」と言った。キャッチコピーは、「クモの糸より細く、鋼鉄より強い繊維」と言うものだった。1940年5月15日には、デュポン社はナイロン製ストッキングを発売した。

ては、歌詞、楽曲ともに、当初から賛否両論があり、とても国歌として定着できるという状況ではなかったようです。

それでも明治二十年代には文部省も、この曲を小学唱歌に取り入れ、祝祭日などの儀式の時に歌われたということです。この段階になると「君が代」は、天皇のご寿命とその治世の永からんことを願う意味が強かったと考えられます。

さらに、日清、日露戦争を挟んで、明治後半には「君が代」は、言わば準国歌的な存在として順次、全国的に普及して行きました。

その後、大正、昭和、と時代の変遷とともに、「君が代」はその意義を変遷させて、今日にいたっています。

「君が代」ほど、発足以来今日まで、何かと政治的に利用され、また論議を呼んだ楽曲はめずらしいのではないでしょうか。

日中戦争、太平洋戦争では天皇賛歌的な意味を深めるとともに、「海ゆかば」「軍艦マーチ」とともに、三位一体となって、戦意高揚の一助として利用されました。

この時代には、「君が代」は、神聖な国歌としての扱いとなっていました。

戦後になって、戦前のこうした暗い歴史を持つ「君が代」についての批判もあり、一時、忘れられたような時期もありました。やがて文部省による「君が代」推奨があり、これに反対する日教組との間に激しい論争が起こります。以来、今日まで「君が代」についての賛否は両論があります。広く知られた曲でありながらも、なお、国歌として定着しているとは言えない状況にありました。

「君が代」が国歌として法的に、日本国歌となったのは、ずっと後の一九九九年（平成十一年）のことです。「国旗及び国歌に関する法律」の制定がありました。その意図は、「日の丸」掲揚と「君が代」演奏・斉唱の確実な普及にありました。今日、公立学校では入学式、卒業式などで、強制的ではないのですが、「君が代」は歌われているとのことです。

「君が代」についての日本人一般の反応はどうでしょうか。

最近「君が代」がもっともよく聞かれるのは、スポーツ界です。

昨年行われたラグビー・ワールドカップの日本チーム出場ゲームは、TV視聴率も高く、多くの人が試合開始前の国歌交換で「君が代」演奏を聞いたものと思われます。

ただ、選手、観客をふくめ、演奏に合わせ、「君が代」を歌っている人はそれほど多くないように見受けられました。

大相撲千秋楽にも、優勝力士の表彰式で「君が代」演奏がありますが、やはり同様な感想を持ちました。

前記のとおり、公立学校中心に、「君が代」演奏や斉唱はあるとのことですが、それ以外にはあまり聞くことも歌うことも、多くはないように思われます。

そうは言いながらも、日本人で「君が代」という楽曲を全く知らないという人はほとんどいないと思うのです。前記の真田氏が「ふしぎな君が代」と述べられていることがよくわかります。同氏は著作の中で、国歌としての「君が代」の存在は、われわれ日本人にとって、「消極的な肯定とでもいった状況にある」と言っておられます。

音楽を専門とする方たちの「君が代」評には、「歌詞と旋律が不一致」といった指摘もあったようですが、作曲家の團伊玖磨氏は、「君が代」について、概略次のような発言をしておられます。「歌詞が短く、エスニックで平和的な内容であることが国歌として好ましい。その意味で『君が代』は、音楽として、歌曲としては変な曲だが、国歌としては最適な曲だ」と。

歌詞は、1100年余の昔に、楽曲としては140年前にさかのぼる「君が代」―紆余曲折を経て数奇な運命をたどって来た国歌です。時にけなされ、蹴飛ばされ、ののしられ、時におだてられ、もちあげられ、さらには神様扱いされてきた「君が代」。人であれば、心から「お疲れさまでした」言ってあげたい心境になります。

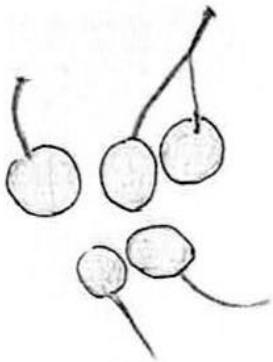
この文章を書いている途中で、筆者は、何度も「君が代」をそっ

と小さな声で歌ってみました。以前この曲を歌ったのはいつだったかなど、とても思い出せないほど、“遠い歌”なのですが、なぜかとても懐かしい曲のように思えてくるのでした。

わが君は
千代に八千代に細れ石の
いはほとなりて苔のむすまで

昔むかし、「或る人」が、また「或る人」へ、「長生きしてください」と祈りをこめて贈った一つの和歌は、今も、日本人の心のどこかで生きていて、またこれからも生き続けていくと思っています。

そして、かなうことならば、これからも「君が代」が平和を祈念する日本の国歌として、末永く歌い継がれて行くことが出来れば、と心から願うのです。

おわり

（記事訂正について）
本稿前号の「古歌を訪ねて・九」46頁・2段目・16行目
誤…400年　正…300年
お詫びして、訂正いたします。